

報恩講（ご法話：臨床僧侶・長倉伯博先生）ご案内

日時・内容

11月 9日（土） 午後1時30分～午後4時

勤行、仏教讃歌[♪]、法話（15時頃から）、弁当[※]

♪ 静岡混声合唱団 TERA 代表・常任指揮、浄土真宗本願寺派教覚寺御住職、南荘宏先生をお迎えします。

※弁当をお寺で用意致します。初日12日はお持ち帰り頂きます。

11月10日（日） 午前10時～午後12時15分

勤行、法話（10時45分頃から）、弁当会食[※]

※ 弁当をお寺で用意致します。お寺の座敷等でお召しあがり頂けます。お持ち帰りも出来ます。

午後1時15分～午後2時15分頃

座談会（お話し合い）[※]自由参加

講師

長倉 伯博 師（次頁の講師紹介をご参照ください。）

講題

「病棟で出遇った方々」 ～医療と仏教の協働への期待～

「お釈迦様以来2500年、その教えをお念仏の道としてお示し下さった親鸞様から800年、今年も報恩講として真勝寺にも息づいています。

誰もが逃げるわけにはいかない老病死の現実に向き合い、力強く生き抜いた方々の物語を、オムニバスのようにお話ししたいと思います。お会いすることを楽しみにしております。」講師

会場

真勝寺本堂

駐車場

報恩講**初日は真勝寺駐車場のみ**ご利用下さい。

2日目は、真勝寺駐車場とお寺から200メートル南東にある

「新潟運輸静岡支店」様の駐車場をご利用下さい。

初めて車で来られる方にはご説明致しますのでお問い合わせ下さい。

会費

無料

対象

どなたでもご参加していただけます

（当日、檀家への勧誘行為や信仰の押しつけ、名簿の記入は行いません）

報恩講とは

^{ほうおんこう}報恩講は、1262（弘長二）年に90年の生涯を閉じられた親鸞聖人の

11月28日の御命日、またはその前後の期間を中心に、京都の真宗本廟^{しんしゅうほんびょう}（東本願寺）や全国の浄土真宗の各寺などで勤められる親鸞聖人の御法事です。私たち真宗門徒にとって1年で最も大切な御仏事として伝統されてきています。

報恩講は、^{ざいあくじんじゅう}罪悪深重の凡夫^{ぼんぶ}というこの私の身の事実、人間存在の本質を告発して下さり、その罪悪深重の身を生きている者こそ何としてでも救いたいと誓い願われる阿弥陀如来の本願を信じ念仏者となって立ち上がり、いのちを再生していくことのできる道を示して下さった親鸞聖人に出遇いなおし報恩謝徳していくことを誓い合う、大事な御仏事です。

荘厳なお勤めやお飾り付け、大切なお話や心暖まる歌の合唱、おいしいお齋^{とき}のお弁当をご用意して、皆様のお参りを心よりお待ちしております。

【講師紹介 1】



病院や在宅の臨床の現場で20年以上にわたりご活躍されているお坊さんです。

1953年、鹿児島県のお生まれ。

早稲田大学第一文学部東洋哲学科卒。龍谷大学大学院博士課程修了。

浄土真宗本願寺派善福寺住職(鹿児島市)。浄土真宗本願寺派布教使。

浄土真宗本願寺派ビハーラ(註1)活動推進委員。鹿児島刑務所教誨師。

龍谷大学、滋賀医科大学、京都光華女子大学、鹿児島女子短期大学、

非常勤講師。

鹿児島緩和ケアネットワーク評議員。国立南九州病院倫理・治験委員。

国立病院機構鹿児島医療センター緩和ケア委員。

鹿児島いのちの電話スーパーバイザー。

読売テレビ宗教の時間「心の点滴」出演(1999年)。

テレビ東京ドキュメンタリー人間劇場「心に愛の点滴を一命を見つめる僧長倉伯博一」(2000年)で、病院での僧侶としての活動が紹介される。

仏教伝道協会第47回仏教文化賞沼田奨励賞受賞。

※註1

「ビハーラ」とは、インドの古語であるサンスクリット語(梵語)で「休息・安らぎ(の場所)」「僧院・寺院」を意味します。

その昔、日本では悲田院(ひでんいん)・施薬院(せやくいん)ともいわれ、心を病む人にはお法(みのり)をつたえ、体を病む人には薬をあたえました。お寺は病院や老人ホームの役割を果たし、地域の医療や福祉の拠点でもありました。

現代では、仏教の立場から末期患者とその家族に対する仏教ホスピス、または苦痛緩和と癒しの医療や福祉を考える活動・施設・団体としてこの言葉が用いられています。

具体的な活動として、特定の病院や福祉施設で、診断の初期から終末看護、終末看死の期間において、仏教者と医師、看護職ないしメディカルソーシャルワーカー（医療福祉相談員）などが協働し全人的ケア（身体と精神に対する鎮痛・対話・介助・朗読・訪問・相談・法話など）に取り組んでいます。

【講師紹介2】（「かごしま緩和ケア・ネットワーク」様ウェブサイトより転載）

坊さん奮闘記2 本願寺派善福寺住職 長倉伯博

■安楽死、自殺幫助、囑託殺人の依頼

今回からは、今までに出会った患者さんや家族、医療者の方々とお付き合いを古い方から現在に至るまで順に紹介しようと計画していて、この方のことは連載の先の方でと考えていた。しかし、一本の電話で私の気持が高揚してしまった。それで、順番を入れ替えて今回紹介することにした。四月初めのこと、外出先から少し遅めの帰宅で、いつものように留守番電話のメッセージを聞こうとボタンを押した。すると、「合格しました」という声が出てきた。思わず、もう一度聞き直した。そして、彼の声に間違いないと確認して、受話器をじっと見つめながら、私は九年前の春をしきりに思い出していた。

電話の彼は現在三十五歳になるが、当時は二十六歳。塗料会社の役員をしていた父親の仕事の縁で、塗装工として家族を支えていた。そのころ、彼の父親は五十歳で、十六年にわたるガンの最終段階にあり、その年の六月には臨終を迎えることになる。

それから四年後、その彼が思い立って、まず准看護師の資格を取り、結局五年がかりで正看護師になったというのである。三十歳にもなって、それまでとは全く方向の違う分野の仕事を目指し、十歳以上も年の離れた同級生と机を並べ、アルバイトをしながら苦学の果てに成し遂げたというだけでも称賛に値するが、その努力の陰に今は亡き彼の父親の存在が思われてならないし、彼自身の口ぶりからもそんなことがうかがえるのである。

記録では父親の最初の手術は、彼が九歳の時。元気な父の姿はあまり記憶にないという。最初は直腸と大腸のガンだった。その後十六年間に大小二十五回の手術（本人、家族のことば）を受けた。亡くなる前年の暮れには、「春の桜までは無理かもしれない」と告知されたが、三月の末になって、まだ持ちこたえていた。しかし、下肢まひで、疼痛の訴えは強く、そのせいか不眠も続いていた。

■「死なせてくれ、殺して欲しい」

そのころ、大学病院の麻酔医から連絡があった。「患者さんの相談に乗ってくれる坊さんがいると話したら、ぜひ会いたいという。最後は自宅で迎えたいとの本人の希望で、今は在宅ケアチームを組んでいる。少し遠い所だが出かけてくれ」との依頼だった。

その医師に案内されて四月三日が最初の訪問。それから彼の父親との付き合いは六月二十四日午前零時五十三分まで続くことになった。お互いに紹介がすみ、二人きりにしてもらった。

「あなたに人生最後の頼みがある。お願いだから、死なせてくれ、殺してほしい。自分で死のうとしたが今はその力さえない。一休さんや良寛さんをはじめ、お坊さんは困った人を助けてくれたじゃないか。私を救うと思って手伝ってくれ。ここにどれほど死にたがっているか書いておいた。これがあれば、最悪でも執行猶予ですむだろう」

そう言って、彼は目に涙をためて、一枚の紙を差し出した。今思うと、安楽死、自殺幫助、囑託殺人の依頼である。

■励ましにあまりに意味のない状況

こういった際に、気弱になるなとか、もっと明るいことを考えろとか、人間はだれもがいつかは死ぬんだからがんばれとかの励ましはあまり意味がないことは、それまでの私のささやかな経験が教えてくれていた。だから、どうして死にたいのか、殺してほしいのか、もう少し話してくれないかと頼んでみた。

彼は胸の内を吐露し始めた。

■聞き続けて変化する関係

「妻は、今日で四日もろくに寝ていない。夜中に気が付くと身体をさすってくれている。今までにも何回もこんなことがあった。私が死んだ後、看病疲れで倒れるのではと思う。もういい加減に妻を楽にしてやりたい。病気になってから十六年もこんな男につき合ってくれて心から感謝している」

「子どもたちもこんな生活のなかでよく成長してくれた。でも、五十歳の親父が、二人の子どもの稼いでくるお金で生活しているなんて話がどこにある。それなのに、給料日になると、そっくり妻に渡し、お父さん今日はすきやきでも食べようか、と声をかけてくれる。もう充分です。自分で稼いだお金は自分で使わせてやりたい。お願いです、私を死なせてください」

彼は目に涙をためて、絞り出すように話した。胸が熱くなった私は、彼の手を握り締めたまま、言葉を失った。

「あなたにとって、自分の命より何より大切なご家族なんですね」

しばらくして、私がようやく口を開くと、彼はうなずきながら涙を溢れさせた。そして、こんな辛い話を聞いてくれてありがとう、という。

■何を語るかという前に共感し受け容れる努力を・・・

私は、その時彼の表情の変化に気がついた。最初に比べると、とても穏やかになっている。聞く内容はとても辛いですが、話し続けるうちに楽になった様子がかげえる。

実はベッドサイドにいと、こういう経験をすることがある。死なせてくれ、という言葉に直接答えることは難しいが、心を傾けて聞き続けることで、相手と私の関係が変化するのだと受け止めている。辛い話が心の中から言葉として表に現われるとき、それは信頼の扉が開きかけた証左といってもいいだろう。

宗教者の臨床活動も、このことが前提になって初めて可能になる。何を語るかという前に、共感し受け容れる方にこそ努力を傾けることが求められている。人生の意味や生死の問題などのスピリチュアルな問いは、その後に顕在化してくることが多い。

最初の面談から一ヶ月ほどして、長いこと親の命日にお参りしていないから、お経を読んでくれという。医師や看護師に手伝ってもらい、車椅子で移して仏間に連れていった。お経が終わると、その中にはどんなことが書かれてあるかと問うた。私は、お経の成立から話し、倶会一処、極楽浄土でまた会えるよ、私も必ず往くから、というようなことを話した。

「本当をいうと、お坊さんにもっと早く会っておけばよかったと後悔していたけど、また会えるんだ、良かった、この世では短いけど、長い付き合いができるんだな」

彼が手を合わせると、そこに居合わせた医療チームも静かに手を合わせた。それから、一ヶ月ほどして、いよいよ臨終の日がきた。医師からの知らせで、間に合わないと思いながら、車を急がせた。着いてみると、瞳孔は開いて意識はないという。手には不規則なけいれんがあった。その手を握り締め、今着いたよ、と叫んだ。あらためて瞳孔を確認した医師が、驚いて意識が戻っているという。家族がそれぞれに、父観への感謝を告げた。言葉を発することはできないが、目尻から涙が一筋流れた。そして笑顔が浮かんだ。

医師が臨終を告げた。誰からともなく、拍手がわいた。見渡すと皆涙を流していた。

◎連載にあたって・・・

終末期医療の現場で活躍する僧侶の奮闘記一。今日から、長倉伯博（ながくら・のりひろ）浄土真宗本願寺派善福寺住職（51歳）＝鹿児島市福山町＝の連載が始まります。日本緩和医療学会会員の長倉住職は、地元の鹿児島で医師や看護師らと「かごしま緩和ケア・ネットワーク」を立ち上げ、医療チームの一員として患者や家族のケアに日々取り組んでいます。鹿児島大学と滋賀医科大学の非常勤講師もつとめ、医学生に「医師は患者の最後の友人になってほしい」とアドバイスする長倉住職。スタッフの人間関係が鍵になるという緩和ケアの現場をレポートしてもらいます。

(<http://kpcn.umin.jp/index.html>)

【お問い合わせ】

真宗大谷派 自然山 真勝寺

静岡市葵区長沼 2-1 8-2 3

054-261-3328 FAX054-261-2970

Eメール：makoto0100@mac.com

(担当：副住職 一郷真 090-6336-4597)